

# 藤倉憲一氏（新授業デザイン研究会）× 武元康明氏（半蔵門パートナーズ株式会社）連続講演会 多文化社会を創造的に生き抜くための異文化跳躍力育成について

報告 田島充士

## 1. はじめに

報告者が研究代表を務める科学研究費補助金・基盤研究（C）『多文化社会を創造的に生き抜くためのリーダーシップ養成・「異文化跳躍力」の提案』の主催事業として、人材育成に関する実践研究者である藤倉憲一氏（新授業デザイン研究会）と武元康明氏（半蔵門パートナーズ株式会社）を本学に招き、連続講演会を実施した。それぞれの講演者には科研のテーマにあわせ、異質な活動文脈を背景とする者が協働し、それぞれの立場を参照しながら、新たな言説を創造するようなコミュニケーション能力（報告者が科研で提案した異文化跳躍力に該当）の重要性に言及するよう、依頼していた。来場者はそれぞれ、およそ二百名だった。本レポートでは両講演会に共通するキーコンセプトを「多文化社会を創造的に生き抜くための異文化跳躍力育成について」と設定し、その内容について報告する。

## 2. 藤倉憲一氏講演について

二〇一八年十二月十四日には、小学校現場を中心に活躍する

教育研究者である藤倉憲一氏をお招きした（講演タイトル『学習者の主体性を促進する教員の権威と権力…学びを深めるリーダーシップ』）。藤倉氏は大阪市教育研究会において理科部長を務めた実践研究者であり、大阪教育大学教育学部附属天王寺小学校および、大阪市立小学校において長年、様々なアイデアを持つ子どもたち同士が話し合うデイスカッション型教育実践の開発を行ってきた。本講演では、藤倉氏の実践経験および研究成果をもとに、子どもたちの主体的な学びをリードし得る教員の「リーダーシップ」について、「権威（フォロワーが信頼するリーダーの力）」および「権力（フォロワーを従わせる力）」をキーワードとして、お話をいただいた。

教員の権力は一般に、学習者の主体性を奪う働きとして受け止められる概念である。しかし藤倉氏は、学習者の主体性を促進するための高度な学習環境を組織し、彼ら一人ひとりの学びを深化させる繊細かつ困難な働きかけを行う上で、教員が自身自身の権力を自覚し、子どもたちの間での確に行使できることが重要と指摘する。そしてこのような授業のモデルとして、「黒板を子どもに渡す」と呼ぶ実践プランを提案する。ここでいう黒板とはあくまでも象徴的なものであり、黒板を子どもに渡す実践とは、子どもたちが学ぶべき「正解」（その多くが黒板に書

かれる)を表現する教員の権利を子どもたちにゆずり、彼ら自身の声を授業展開に深く反映させるような実践を示す。そしてこの種の授業では多くの場合、教員が「黒板」となつて子どもたちの間に入り、異なる意見を取りまとめながら、教室全体の物語を構成する権力を行使することになる。

藤倉氏は、このような教員の権力の行使により、子どもたちは彼ら単独ではなし得ない水準で、自らの活動文脈を率直かつ自律的に開示し得るようになるのだと主張する。そしてこの種の相互交流を通し、互いの視点を参照しつつ、自分自身の意見を豊かに構成していく異文化跳躍力を実現させるのだという。また教員のこの権力行使は、次第に子どもたちが教員に向ける信頼感としての権威を醸成し、将来、彼ら自らが他者との出会いにおいて異文化跳躍力を発揮するリーダーシップの源泉にもなるのだと論じる。

### 3. 武元康明氏講演について

二〇一九年一月十一日には、武元康明氏をお招きした(講演タイトル『あなたにとつて一番大切なものは何ですか…日本最強ヘッドハンターが語る、実社会が希求するリーダーの実像』)。武元氏は経済界・医学界を中心に活躍する著名なヘッドハンターであり、ビジネス界における実践経験から、実社会において活きる人材開発に関する研究を進めてきた。本講演では武元氏のこれまでの研究成果をもとに、実社会において求められるリーダーの具体像について、武元氏自身が監修したテ

レビドラマ(テレビ東京・ドラマBin『ヘッドハンター』(二〇一八年四月―六月放送))の映像資料も交えながら解説していただいた。

武元氏は、自分の見解と他者の異質な見解との創発的な接続を可能とする「バランス感覚」、必要に応じて自分の見解に対するこだわりを捨てることが出来る「切断力」、他者との協働関係の見通しを持つ「大局観」が、異質な活動文脈を背景とする他者との協働において発揮されるリーダーシップのリソースになると指摘する。これらは科研で設定した異文化跳躍力を構成する具体的な要素といえる。そしてこの種の能力の養成に当たっては、自らの能力に対する「自尊心」および、他者に対する「尊重」が高いことが必要になるとされる。しかし武元氏によると、諸外国と比較して、日本の多くの若者にこれらの心性が十分に育っているとはいえない状況だという。

特に今後予想される労働環境のグローバル化および、就労期間の長期化により、これまでのように最初に所属した組織で最後まで働き続けるケースは少なくなると考えられる。このような状況においては、自尊心を持って自らのキャリアをコーディネートし、また様々な組織に属する他者との協働をリードする力が必要になってくる。そのためには学校において、藤倉氏が提案したような、課題について学習者自ら考え、自ら他者と交渉し、共に学ぶ仲間にとつて納得のいく「物語」を生みだしていく教育・学習環境を提供することが必要であると武元氏は主張する。

